

# 太宰府の文華と公文書館だより 145

## 太宰府天満宮の造営と大内氏

ページID…7241

いま太宰府天満宮では、令和9（2027）年の式年大祭に向けて、社殿の改修・葺き替え工事が進められています。そこで今回は、天満宮の社殿造営について、中世の事例を取り上げてみたいと思います。ただ、中世の天満宮造営に関する史料は断片的にしか残っていないので、その中でも比較的多く残っている戦国時代の一事例をご紹介します。

戦国時代の初期にあたる文亀2（1502）年の11月、筑前国を治める大内義興は天満宮に対し、早良郡（現福岡市早良区・城南区周辺）内にある天満宮の領地に半済を実施するのを免除しました。半済とは年貢の半分または土地の半分の一時的に領主から取り上げて、必要な費用を捻出する施策です（本紙1月号に詳述）。大内氏は同郡にある支城の安楽平城（現早良区内野付近）に在番する家臣たちに扶持を与えるために、郡中の寺社領に一律に半済を行って費用を確保しようとしたのです。

これに対し天満宮は大内氏に訴えて、当宮は昔から臨時の諸税・負担

を免除されていますと、証拠書類を提示して主張しました。また、いまは造営の最中であり、これで作業が止まったら、神官・社僧たちの悲しみは甚大です、とも述べています。ここで当時、天満宮では造営が行われていたことが判明します。しかし、具体的な様子については何も記録されていません。なお一部の史料には「造営」ではなく「修造」と記されているので、全くの新築や立て直しというより、修理というべき実状だったのかもしれませんが。

その3年前の明応8（1499）年6月、太宰府天満宮が炎上したとの知らせが京都に伝わっています。前年の同7（1498）年には天満宮の大鳥居が焼けたという記事もあります。後世の編纂資料によると、同7年の11月22日に、少弐氏の残党と大内氏との戦争の兵火にかかり、天満宮が延焼したとされています。恐らくこの火災が、造営の直接の契機だったのでしょう。それでは造営はいつ完成したのか、実ははっきりせず、その後も造営について触れた史料が点々と残されています。